

研究報告の発刊によせて

昭和57年6月開館した穂別町立博物館も第2年目を迎え、いよいよ館の研究報告書を発刊する運びとなった。これは非常に喜ぶべきことである。

いうまでもなく、博物館の活動は資料の調査収集、研究、保存管理、展示、教育普及などが総合化されたものである。そして、調査研究はこれらの諸活動を有機的に結びつけるための基礎活動であり、博物館機能として欠くことのできないものなのである。したがって、多くの博物館においては、教育普及や案内パンフレットなどととも、それぞれの館における調査研究の成果を公けにするために「研究紀要」とか「研究報告」という名称で刊行している。しかし、この種の刊行物は予算はもちろんのことであるが、館活動の中心となる学芸職員がいなくては、出版したくともできるものではない。

北海道には現在、博物館、郷土館、資料館などが180館を越えているが(動・植物園、水族館を除く)、「研究紀要」のたぐいを刊行しているところは、わずか10余館である。穂別町立博物館が、今回、このように立派な「研究報告」を刊行したことは、学芸員の鈴木茂氏の努力もさることながら、調査研究の重要性を深く認識され、刊行への決裁を下された町教育委員会教育長、館長をはじめ関係各位に深く敬意を払うものである。

ところで、博物館における調査研究活動とその成果の集約としての「研究報告」の重要性については、一般的に強調されているが、それらの意義や役割、位置づけなどについては、「研究紀要」などを刊行している博物館においても十分な検討もなされず、その編集方針などもどこに重点をおいているのか疑問になるものもある。

一般に、博物館の「研究報告」は各館の調査研究事業の実績を示すとともに、館員個々の業績ともなるものである。また、それは大学をはじめ関係研究機関、学会、個人研究者などに研究の情報を提供するとともにそれぞれとの交流を促進させる。逆に交流を深めることにより、広範な資料の収集、情報サービスの充実を可能にするものなのである。しかし、このような「研究報告」のあり方は比較的学芸員や研究職員を揃えている博物館の場合である。学芸員が少数の館の場合は、そのあり方はおのずと異なってくる。このことは、単に「研究報告」の出版事業ばかりでなく、他の館活動についても同様であろう。

学芸職員が少ない小規模博物館の館活動は、多くの場合、そのすべてが学芸職員にしわよせされ、学芸員は雑芸員化して館事業も停滞しがちになる。したがって、それらの事業を発展させるのには、どうしてもボランティアの組織化でカバーしなくてはならない。また、そうすることにより、その博物館がより地域に結びつき、充実されてくることになる。

したがって、地域博物館の「研究報告」のなかには、博物館を中心とし生きいきとした地域の自然や歴史を研究するグループ、あるいは個人の研究報告が数多く掲載されることが必要なのではないだろうか。道内においても、館の調査研究に協力した学校の先生や研究グループなどの論文、報告などが掲載されたものもあり、ユニークな活動状況が伝わってくるものがある。このような「研究報告」こそ地域の人々との連携を強めることになり、同時に地道な地域研究を広く世に問うことになるのである。まさに、博物館活動の原動力となるものである。そのような意味で穂別町立博物館の「研究報告」の充実を期待するものである。

北海道開拓記念館学芸部長

北川芳男